
フラッシュ スター

おとぼけスミー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フラッシュ スター

【Nコード】

N1024S

【作者名】

おとぼけスミィ

【あらすじ】

きらびやかに光ったあの星は、彗星でも流星でもなく、蛍の光よりも鮮やかだった。

(前書き)

この話は、八裂き兎さんの提案から書かれた短編です。趣旨としては、「魔理沙の弾幕戦」がメインの話を書く事です。主人公等は特に縛りがなかったので、リグルの視点で描いています。なお、原作は頑張ったのですが、書き手がイージーで困る輩なので、多少オリジナル要素を加わえているところもあります。後、永夜抄の後日談のような話ですので、ごっちゃにはしないでください。

ではどぞ。

綺麗だった。あいつが見せてきた星が、あまりにまぶしかった。

私の光なんかじゃ比べられないほど、まぶしくて、綺麗だった。

夜空のきらびやかさと相まって、それは一層光って見えた。

だから、悔しかった。あの光に見惚れた自分が。あの光に負けた自分が。

人間に負けた。だけの悔しさじゃない。私はあまりにも歯がゆかった。

あの光を、もう一度見たい。そして、あいつに勝ちたい。

もう見惚れはしない。私の光で、あの光に勝つ。

今宵の夜空に一番光るのは、私自身だって事を教えてやる。

宵の時間。夜空が広がり、生きとし生けるものは休息の眠りにつく時間。

そんな夜空に二人、漫然と対峙している者達がいた。

緑色の髪と黒いマントをなびかせた一人は、明らかに殺気立って相手を見据え、
金色の髪をなびかせ、箒にまたがったもう一人は欠伸をしている有様。

二人の間に、明らかな温度差がある状態だが、それでも殺気立つ一人は真面目である。

「ここで会ったが百年目ね！！人間！！」

テンションを上げて、対峙する者に思いっきり指差すが、
差された方は相変わらずうだうだした様子である。

「ただの人間じゃねえぜ。私は普通の魔法使い、霧雨魔理沙だけ。
ところでお前、名前は何だっけ？」

頭をぼりぼりと掻きながら、失礼極まりない質問を飛ばす魔理沙。

対峙する者は声を荒げ、自己主張をする。

「名前はその時名乗ったじゃない！！忘れたって言うの！？
リグル・ナイトバグよ！！」

「リグル・・・・・・・・・・・・・・・・えーっと・・・・・・・・・・・・・・・・えーっと・・・・・・・・
・・・・・・・・
ああ、思い出したよ」

顎に手を当て、記憶の隅を探った後、手をポンと叩き合わせる。

その様子に少しだけ安堵したリグルは、再度の言葉をかけた。

「元々そのつもりだったけど……もう手加減しないわよ！」

その言葉とほぼ同時に、リグルの周りにあった光弾が、魔理沙目掛けて放たれた。

光弾はゆっくりと円を描きながら、魔理沙を引っかくように飛んでいく。

魔理沙はそれらの光弾をじっくりと見定めるように、かすらせて避けていく。

それに対して怒りを覚えたリグルは、違う軌道の弾幕を構えていた。

「そんな避け方でえ、避けきれると思ってるのかしら!？」

その言葉と同時に飛ばした光弾は、真っ直ぐに魔理沙を捉えるように飛んでいった。

しかし魔理沙は、それらを何の苦もなく悠々と回避していく。そして、リグルとほどよい距離を取ったところで、ようやく攻撃の構えを見せた。

「避けてばっかりじゃ面白くないぜ……今度はこっちの番だぜ!！」

レーザーに似た綺麗な弾幕が、リグルの体を貫くように飛んでいった。

「ぐう！！」

多少はひるんだものの、即座に態勢を立て直し、すぐさま弾幕を放つ。
今度の弾幕は、彼女を中心として、ぐるぐると回っていく弾幕である。

先ほどまでの弾幕との決定的な違いは、その数と速度。そして動きである。

丁度魔理沙が飛んでいこうとする場所を阻害するように飛んでいく弾幕に、

魔理沙は少なからず焦燥感と憤りを隠して膨らませていた。

「（ちっ……めんどくさい動きさせてやがるぜ……こ
うなったら……）」

弾幕を小刻みに避けながら、魔理沙は懐からある物を取り出した。取り出したのは、八角形の形をした物、ミニ八卦炉である。

魔理沙はその手にじっくりと魔力を灯し、ミニ八卦炉に魔力を注いだ。

それと同時にミニ八卦炉も光を宿し、魔力が高まっていく。

リグルも魔理沙の魔力の高まりを察知はしていた。

しかし、察知出来ても今の彼女は対処するような素振りを見せていなかった。

無数の襲い掛かる弾幕をかくぐり、魔理沙はミニ八卦炉をリグルに構えた。

「ちまちまやるのは性に合わねんだ………一気に決めるぜ!!!」

恋符!!! マスタアアスパアアアアアク!!!!!!」

己の中にあつたイライラを発散させるかのように、虹色のレーザーが放たれる。

巨大な光線はリグルとリグルの放った弾幕ごと飲み込み、それでもなお足りず、真っ直ぐに夜空へと伸びていった。

巻き込まれた木々は削られたかのように焦げ、リグルのいた場所に彼女はいなかった。

魔理沙はミニ八卦炉をしまい、上空へと飛んで戦況を確かめた。

「ありや……やりすぎたかな………何も残ってないぜ………」

きよるきよると周りを探すが、どこをどう探してもリグルの姿はない。

魔理沙の一撃は、マスタースパーク確かにリグルをしつかりと捉えていた。

なれば、ダメージを食らった彼女がその場においてしかるべきである。

それでも彼女がいらないのなら、魔理沙はおのずと答えを導き出そうとする物である。

「うーん……これは消し飛んだか……消し炭になっただか……」

「はたまた空の彼方に飛んでいったか……一体どれだろうなあ……」

箒にまたがり、あらゆる可能性を探る魔法少女。

しかし、それらの答えを超える答えが、闇夜から聞こえてきたのだ。

「そのどれももないわよ、霧雨魔理沙」

「ッ!？」

魔理沙がその声を聞いた瞬間に、闇夜から神速の爪が彼女を襲い掛かった。

魔理沙は寸前でどうにかかわしたが、箒にかすったのか、掃除をする部分が少し削れていた。

魔理沙は向き直り、牙を向いてきた対象に目を向けた。

そこにいたのは、妖しい笑顔を浮かべ、爪をぺろりと舐めていた夜雀、

ミスティア・ローレライが、不敵に歌を歌っていた姿であった。

「夜道は危ないことだらけ　　だけど人間はわからない
危ないって事もわからない　　だから私が教えるの」

「下手な歌・・・・・・・・歌いやがって・・・・・・・・」

「悪いわねえ魔理沙。今日はミスティアも呼んでみたのよ。

さっきあなたが撃つたのは、闇に移った私の姿・・・・・・・・偽りよ」

ミスティアと二人で魔理沙を挟むように、リグルの声が闇夜から響く。

魔理沙は額に一筋の汗を垂らし、今の状況に冷静に分析し始める。

「（えーっと・・・・・・・・どうやら二対一になってるみたいだな

一人じゃ勝てないからって・・・・・・・・やれやれだぜ・・・・・・・・

でも・・・・・・・・こうなった以上は四の五の言ってられないぜ

・・・・・・・・

さっきので魔力は行使したんだ……無駄撃ちは出来ないぜー!!」

そう思い立った魔理沙は、即座に空へと飛び立っていく。

「逃がさないわよ!! 魔理沙!!」

「どこに行っても、あなたは鳥目のままよ!!」

リグルの弾幕が魔理沙を囲うように襲い、魔理沙の視界ははばまっ
ていく。

「ちい!! 分の悪い喧嘩しやうわだぜ……」

どうにか弾幕を回避していくも、鳥目のせいもあってか、だんだん
被弾していく。

その状況が良く見えるリグルは、高笑いをしていた。

「いいざまね!! 魔理沙!! そのまま落ちなさい!!」

攻撃の手をゆるめないリグルとミスティア。魔理沙は完全に防戦一
方である。

やがて無数の弾幕の内、一つの弾幕が魔理沙の横腹に命中し、魔理沙は大きく態勢を崩した後、箒から落ちてしまった。

その瞬間を待つてましたと言わんばかりに、リグルとミスティアは落下すると思われる場所にて構えていた。

「これで最後ね！！魔理沙！！」

「おーちたおちた 人間がおーちた」

愉快そうにしている二人をよそに、魔理沙は一人、不敵な笑みを浮かべていた。

「チャンス・・・・・・・・・・到来だぜえ！！」

落下していく中、魔理沙は愛用の箒をその手で掴み、箒に魔力を灯した。

「い、今更何をしようって言うの！？」

「そつだそつだ！！そのまま落ちれば楽になれるんだよ！？」

焦る二人を前にして、魔理沙は不思議と余裕のある態度を見せてい

た。

「悪いが私はあきらめが悪いし、簡単に物事がすむのは気がすまないんだぜ……」

このままお前ら二人にい……”思いっきり”これ”を叩き込んでやるぜ!!”

魔理沙は落下しながらも箒に魔力を注ぎ、魔力が満ちたと思える段階で、

それをまるで槍投げのように、力強く思いっきりリグルとミスティアがいる地面目掛けて放り投げた。

「彗星!!ブレイジングスタアアア!!投擲バアアアジヨオオオオン!!!!!!」

魔力の満ちた箒は、あたかも隕石のように、地面目掛けて真っ直ぐに落ちていった。

「そんな

」

「ありえな

」

リグルとミスティアは何かを言う間もなく、あっという間に箒は地

面に到達。

すさまじい爆発を起こした後に、リグルとミスティアを派手に吹き飛ばしていった。

「お、覚えてなさい〜……………」

「次は負けないからね〜……………」

三流役者よろしくな台詞を残し、二人は夜空の星になっていった。

魔理沙はそんな二人を感心しながら眺めていた。

「おーおー。これまた見事に飛んでい

」

その先の言葉は、地面に激突して、
派手に自分の形をかたどった落下跡を残して消えていった。

魔理沙は目がぐるぐると回りながら、どうにか仰向けになって空を眺めた。

自分の頭上で回る星がちらつきながらも、薄れる意識の中で、きらめく星に見惚れた。

「そっぴや……………今日の夜空は……………綺麗だぜえ……………」

・・・」

その言葉を最後に、魔理沙はふっと意識が飛び、その場で寝てしまった。

その夜空は、リグルの飛んでいった後を追いかけるように、
無数の蛍達が彩っていた事など知らずに
。

ここはリグルとミスティアが落下した場所。

二人は落下した場所で、ぼろぼろになったお互いを見た後、夜空を眺めるように寝転んだ。

「あーあ、見事に負けちゃったね。リグル」

「悔しいわねえ……………ここまでやられるだなんて……………」

次会ったら、絶対に勝ってやるわ……………魔理沙あ……………」

ふつつつと復讐の炎を燃やすリグル。その心中で、魔理沙の最後の業を思い出していた。

ピンチでありながらも、必死にひねり出された決死の一撃。

それは本来の業とは違う形をしていたと言っても、確かに綺麗な形をしていた。

彗星や流星ではない。あえて言うならやはり「隕石」とでも呼べばいい代物。

あまりの速度に対応しきれなかったと言えは言い訳になるかもしれないが、
実は、リグルの心中では、それだけではない理由が確かにあったのだ。

「……………不覚にも……………また見惚れてたわねえ……………あの星に……………」

魔理沙の最後の一撃。リグルはその光に自然と心を奪われていた。そう、魔理沙が見せた光に、リグルはまたも不覚を取ったのである。しかし今度のリグルは悔しさよりも、むしろ清清しさすら感じていたのだ。

自分はある光に負けた。しかしそれは、負けたからこそ負けたのだ。あんなに強烈な光を、闇で隠そうとしたのがそもそも間違いだっただ。

その答えにたどりついたリグルは、次の戦いに備えるべく、ある誓いを立てていた。

それはたった一つ。とても単純で、わかりやすい答えである。

「今度は、私の光で、あいつを見惚れさせてやるんだから

」

そんな誓いを立てた後に、リグルはミステリアと背中を合わせて眠りに落ちていった。

その周りに、リグルを慕う虫達が集っていたとも知らず。

(後書き)

後書き

とりあえず書けた〜……………これでいいのかな〜……………

うん！！きつと大丈夫！！大丈夫……………大丈夫？

大丈夫を三回唱えたから、きつと大丈夫　ソウシンジレバイイノデス。

最初に思い描いてたのと違うな〜……………あ、いつもお
りだ。うん。

当初の予定としては、「リグルキックVSブレイジングスター！！」
みたいな、
わかりやすい正面衝突な展開にしようかと思っていたので
す。

しかし書いてるうちにあーだこーだしてると、こんにゃ展開になっ
ていたのであります。

ち、違うんです！！指が！！勝手に！！うわあああああ！！！！

これ以上の戯言は止めましょうか。はい。

久々にしっかり書いたつもりなところで、今日はここまで。

最後までのご愛読、真にありがとうございました
ノシ (// ^ | ^)

PS スペカ少なすぎるが大丈夫か？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1024s/>

フラッシュ スター

2011年10月8日01時14分発行